



7 2023

発行所 大阪市中央区玉造2-24-22 カトリック大阪大司教区 広報委員会 郵便番号 540-0004 TEL (06) 6941-9700(代表) TEL (06) 6946-3223(直通) FAX (06) 6946-3224(直通) E-mail: jho@osaka.catholic.jp 編集 広報委員会 発行人 前田万葉

本紙「点訳版」「音訳」があります。〈無料〉※ご希望の場合は下記まで申込み「点訳版(点字本)」 時報 ☎06-6946-3223(直通) 月 ☎06-6946-3224(直通) 「音訳(テープ・デジ)」 山口さん ☎0798-34-4228

☆ 2023年度 小教区・プロック司牧担当者など一覽 ☆ 泉北教会創立50周年記念 ラジオ「信仰の時間」 佐藤永神父 ☆ 泉北教会創立50周年記念 ラジオ「信仰の時間」 佐藤永神父 ☆ 泉北教会創立50周年記念 ラジオ「信仰の時間」 佐藤永神父

☆ イエスにならう生き方を求めて (4画) ☆ 開きたい、神さまと出会う (5画) ☆ カテキズムの学び (4画) ☆ 2022年度教区会計報告 (6画) ☆ jho@osaka.catholic.jp (5画)

『時報』原稿・資料等の締切は前々月末です。



# 変わりゆく葬儀

## コロナ禍で家族葬が増加

### 葬儀の歴史

ある信徒が「自分が洗礼を受けたのは、葬儀を考えた時にどの宗教がよいかと自問し、最終的にカトリックが浮かんできたから」と動機を明かした。葬儀はカトリックにおいても重要な営みである。その葬儀がコロナ禍を経験する中で変化してきているという。編集部では、関係者の話をもとに変わりゆく葬儀のあり方を取材した。

葬儀は人の死を受け止める作業である。その死を受け止める、悲嘆の表出作業(グリーフケア)の機能でありプロセスである。葬儀の歴史は古く、北イラクのシャニダール遺跡から発見されたネアンデルタール人の墓地に埋葬された人骨の周囲から花粉が発見され、死者を埋葬するにあたり花を供していた痕跡だと考えられている。

日本においては、「古事記」に当時の葬儀の様子が記されている。人が死んでもすぐに埋葬せず、長い期間(場合によっては白骨化するまで)死者に食事を供して、歌い踊って鎮魂していた。江戸時代、身分による葬儀の基準が示され、幕府によって庶民の葬儀は簡素化が奨励されていたが、明治時代になり身分制度がなくなると、経済力のある商人たちが大規模な葬送行列を行うようになった。当時は、土葬だったこともあり棺を入れた輿を担いで墓場まで行く、野辺送りが葬儀の中心だった。時に数百人規模で広告宣伝のように市中を練り歩くような派手な行列も現われ、そのような大規模葬列は批判の対象になり、次第に葬列は姿を消すことになった。葬列に代わって、輿を模した祭壇飾りを中心に葬儀を行うようになった。仏式葬儀で見かける白木の葬儀祭壇の原型が生まれたのである。その頃から、家族が



故人との別れを惜しむ通夜、故人を見送る儀式である葬儀、社会的に死を告げる告別式が定着していった。

葬儀は、「いつ訪れるかわからない」「生を奪う」死に対する宗教儀礼であり、故人の家族を取り巻く近隣を中心とした地域共同体(教会では信徒の共同体)が担うようになった。葬儀には会社を休んで参列し、たくさんの人が集まるようになった。

### 葬儀の形骸化

近代以降、特に高度経済成長期以降に、葬儀が「形骸化」しているという。その要因として①死に対する観念が生涯を終えて迎えるものに変わったこと、②葬儀の「宗教儀礼」という地位が低下し、「社会儀礼」の側面が肥大化したこと、③遺族を支えてきた地域共同体が、都市化、核家族化によって解体したこと、④葬儀が「世間に恥をかかない」ために「ただやらなければならぬこと」化したこと、⑤遺族に悲しむ時間を与えないくらいに生活時間がスピードアップしたことがある。

葬儀の形骸化は、葬儀に変化をもたらした。昼間に

## カトリック泉佐野共同納骨所 合同納骨式

5月14日(日)、フラビオ・ベスコ神父の司式で泉佐野共同納骨所の合同納骨式が行われた。泉佐野共同納骨所は大阪教区で6カ所目(大阪府内では2カ所)の共同納骨所となる。初めての合同納骨式はあいにく雨となったが、約20人の遺族が参列し、7名を納骨した。同共同納骨所の開所にあたる準備段階では、泉佐野教会の司祭及び墓地委員の方々に尽力をいただいた。

泉佐野共同納骨所は大阪教区の信徒及びその家族であれば、申込は可能。年2回の合同納骨式となり、次回は11月3日に合同追悼祭と合同納骨式を行う予定。今回の合同納骨式で納骨を希望する場合は、教区本部事務局まで資料請求を行っていただき、8月末までに納骨の事務手続き完了が必要です。大阪教区各共同納骨所の墓参予定は、大阪教区ホームページ「墓地・納骨堂・納骨所」のバナー内の「墓参予定」で確認いただくか、教区本部事務局総務課(管理部門)までお問い合わせください。

大阪教区ホームページ「墓参予定」サイト <https://www.osaka.catholic.jp/cemeteries/requiem.html>

問い合わせ先・資料請求 教区本部事務局総務課(管理部門) 電話: 06-6941-9705



### 家族葬の普及

「葬儀形骸化」とは、人の死に出会った悲しみを大事にしない事であり、葬儀に集う人びとの中に悲しみへの共感が薄れていることを意味している。そのような「葬儀形骸化」への反省から、死を忌避するのではなくきちんと受け入れようとの動きが生まれ、社会儀礼色を一掃した「ジミ葬」や死後の自己決定権ともいうべき「自分葬」の創出という動きが始まった。一方、「自分

の葬儀は身内だけでひっそりと」と考える人が増え、バブル崩壊後の経済不況とも相まって、葬儀の簡素化や個人化が進んだ。この傾向は、リーマンショック以降ますます顕著になり、「直葬」「家族葬」「一日葬」が登場した。そして、社会一般においてもコロナ禍がこの傾向に拍車がかかり、家族葬の需要が高まっており、葬儀社の広告は「小さな葬儀」がメインになっている。カトリック教会においても、コロナ禍以前から家族葬を取り入れられつつあったが、コロナ禍では、聖堂の密を避けるため入場制限が設けられたこともあり、信者の参列を回避する動きが強まり、一気にその動きが加速したという。

### カトリックの家族葬

また、知らせを回さなかったことで、「知らされなかった」と教会委員にクレームがつくこともある。そこで最近、訃報連絡を回す際、「家族葬ですので、ご自分の家でお祈りください」といった工夫をする教会も増えてきた。葬儀は時代とともに変化してきた。教会での葬儀も変化してきている。取材を通して、時代の要請に柔軟に対応する必要があると感じられた。

(文) 広報委員会 委員長 川柳裕明



## 甲山墓参 司祭納骨式

5月24日(水)10時半より甲山墓園で帰天された教区司教・司祭および納骨者のための追悼ミサがささげられ、今年のパウロ竹内新神父、ベネディクトラブレ生藤達男神父の納骨式が行われた。今年度の甲山墓参のこの日は天候に恵まれ、空は澄み渡り、墓園内を時どき気持ち良い風が走り抜けていた。25人の司祭と約130人の参列者が与った。

主司式の酒井俊弘補佐司教は、聖母月に思い出すある女性の幼少期の思い出として、福岡教区報の編集後記を紹介した。話によると女性は長女で、弟が3人おり、外出時は母親の両手が弟たちの手や荷物で塞がり、長女は手を繋ぐことができなかった。そのため、長女は一番下の弟をおんぶした母親から「ロザリオを握っていないさ。それはマリア様と手を繋いでいるのと一緒だから」と言われたそうです。女性ははぐれないよう、手に跡が残るくらいロザリオを握りしめていたそうだ。おかげで一度も迷子になったことはなかったと。聖母月、今回の墓参では、マリア様を通しての、家族間の思い出を思い出した参列者も少なくなかっただろう。晴天に恵まれた中での今回の追悼ミサは、酒



井司教の説教と感へてと、家族の思い出を感じ、祈ることができた。

(文) 教区本部事務局